

日本気象学会 2008年度春季大会

会期：2008年5月18日（日）～21日（水）

会場：横浜市開港記念会館（横浜市中区本町1-6）
横浜情報文化センター（横浜市中区日本大通11）

大会実行委員会担当機関：海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター
海洋研究開発機構地球環境観測研究センター
海洋研究開発機構地球シミュレータセンター
防衛大学校地球海洋学科

後援：横浜市環境創造局
横浜地方気象台
横浜観光コンベンション・ビューロー

大会委員長：時岡達志（海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（開港記念会館2階7号室）
TEL: 090-6046-4671（直通：学会開催期間のみ有効）
※大会参加者への伝言は、開港記念会館1階玄関ロビー付近の掲示板に掲載します。
取次ぎはいたしませんのでご承知をお願いします。

大会実行委員会からのお願い：横浜市の取り組みの一環で横浜市関連施設である大会両会場には原則としてごみ箱が設置されていません。ごみのお持ち帰りにご協力頂きますようお願い致します。

会場案内図



大会行事予定

A会場 : 開港記念会館講堂
B会場 : 情報文化センター情文ホール (6F)
C会場 : 開港記念会館1号室 (1F)
D会場 : 開港記念会館6号室 (2F)
 ポスター会場: 情報文化センターホワイエ (6F), 大会議室 (7F)
 総会・記念講演・公開講演会・シンポジウム : 開港記念会館講堂

企業展示会場: 情報文化センターラウンジ (6F,7F)
 受付 : 開港記念会館3,4,5号室 (1F)
 大会事務局 : 開港記念会館7号室 (2F)
 懇親会 : ローブホテル横浜2F (横浜市中区山下町77, 会場より徒歩10分)

		A会場	B会場	C会場	D会場
5月 18日 (日)	10:00～ 11:30	気候システムI (9, A101～A109)	気象予報 (9, B101～B109)	微量気体 (7, C101～C107)	大気力学I (9, D101～D109)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (49, P101～P149)			
	13:30～ 17:00	公開気象講演会	専門分科会 (18, B151～B168) 「衛星による降水観測：TRMM 10周年を迎えて」	専門分科会 (13, C151～C163) 「大気リモートセンシングデータ解析技術における工夫」	専門分科会 (6, D151～D156) 「季節予報を定量的に利用する」
5月 19日 (月)	09:30～ 11:30	気候システムII (11, A201～A211)	降水システムI (13, B201～B213)	エアロゾル (12, C201～C212)	大気力学II (12, D201～D212)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (49, P201～P249)			
	13:30～ 15:20	総会			
	15:30～ 17:30	学会賞・藤原賞受賞記念講演			
	18:30～ 20:30	懇親会			
5月 20日 (火)	09:30～ 11:30	気候システムIII (13, A301～A313)	降水システムII (12, B301～B312)	観測手法 (13, C301～C313)	大気境界層I (11, D301～D311)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (49, P301～P349)			
	13:30～ 17:00	シンポジウム「海洋観測が切り拓く気候システム科学」			
5月 21日 (水)	09:30～ 11:30	気候システムIV (12, A401～A412)	雲物理 (13, B401～B413)	熱帯大気 (13, C401～C413)	大気境界層II (6, D401～D406) 相互作用 (5, D407～D411)
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (49, P401～P449)			
	13:30～ 17:00	専門分科会 (17, A451～A467) 「南極大型大気レーダーを軸とした極域大気研究の可能性」	専門分科会 (17, B451～B467) 「CMIP3マルチ気候モデルにおける大気海洋諸現象の再現性比較」	専門分科会 (9, C451～C459) 「広域スケールの陸域生物圏研究に関する最新の動向」	専門分科会 (10, D451～D460) 「持続可能で安全な都市環境への気象研究の役割」

発表件数：466件（専門分科会90，口頭発表180，ポスター196）

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には、日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません。ただし著作者自身による利用の場合は、利用許諾の申請は不要です。

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは、〒305-0052茨城県つくば市長峰1-1気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail:kouenkikaku2008s@mri-jma.go.jp) まで。

講演の方法

一般口頭発表・専門分科会

- ・ 一般口頭発表の講演1件あたりの持ち時間は9分（講演7分・質疑2分）です。
- ・ 専門分科会の各講演の持ち時間は分科会毎に決められています。詳細は各分科会のプログラムをご覧ください。
- ・ 講演にはPCプロジェクターとOHPが使用できます。
- ・ 止むを得ない事情で使用機器が講演申込時に予め届け出ていた機器と異なる場合は、セッション開始前までに座長と会場係にその旨を申し出て下さい。
- ・ PCプロジェクターを使用する際は予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応することがあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- ・ 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ・ ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦150 cm×横90 cmとなっています。
- ・ ポスターの掲示にあたって画紙、ピンが使用できますが、糊、テープ等は使用できません。必要な画紙、ピンは各自で用意して下さい。
- ・ ポスターの掲示可能時間は以下の通りとなっています。会場の都合上時間厳守をお願いします。
 - 第1日（5月18日）9:30-17:00
 - 第2日（5月19日）9:30-17:30
 - 第3日（5月20日）9:30-17:00
 - 第4日（5月21日）9:30-15:00
- ・ ポスターは各自が責任を持って撤収し、お持ち帰り頂きますようお願い致します。大会会場ではごみの回収ができませんので、大会実行委員会による掲示時間終了後の撤収は行いません。
- ・ ポスター会場での機器の使用は講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

シンポジウム「海洋観測が切り拓く気候システム科学」

日時：大会第3日（5月20日）13:30～17:00

会場：開港記念会館講堂（A会場）

司会：河宮未知生（海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）

趣旨：

エルニーニョや地球温暖化など、数年より長い時間スケールで気候の変動・変化を予測するためには、海洋垂表層以深の観測データが本質的に重要となる。また熱帯におけるMJ振動など、海洋上で発生する短周期現象の機構解明のためには高い時空間分解能をもつ海洋観測網が不可欠である。近年、こうした認識と技術革新があいまって、海洋観測データの量と質は大幅に向上している。本シンポジウムでは、急速な進歩を遂げる海洋観測技術と、格段の拡充が進む海洋観測網の現状を紹介し、あわせて数値シミュレーションへのインパクトも論じる。講演と討論を通じ、大気・海洋などさまざまな構成要素間の相互作用の総体としての「気候システム」を理解するために海洋観測が果たす役割について、会員諸氏の認識が深まることを期待している。

基調講演：

- 1) 「Argoの成果と可能性」
須賀利雄（東北大学大学院理学研究科／海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）
- 2) 「歴史的海洋観測データに見る海洋気候の変化とデータ同化による20世紀気候再現」
石井正好（海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）
- 3) 「インド洋における大気・海洋集中観測MISMO ー目指したもの、得たもの、残したものー」
米山邦夫（海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）
- 4) 「全球雲解像モデルNICAMによるMISMO-MJO再現実験」
佐藤正樹（東京大学気候システム研究センター／海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）
- 5) 「北極海のカタストロフ的な変化」
島田浩二（東京海洋大学海洋科学部／海洋研究開発機構地球環境観測研究センター）

総合討論

総 会

日時：大会第2日（5月19日）13:30～15:20

会場：開港記念会館講堂（A会場）

議事次第

1. 開会
2. 議長選出
3. 理事長挨拶
4. 2008年度学会賞授与
5. 2008年度藤原賞授与
6. 議事
 - (1) 2007年度事業報告
 - (2) 2007年度収支決算報告
 - (3) 2007年度監査報告
 - (4) 第35期役員を選任
 - (5) 名誉会員の推薦
 - (6) 2008年度事業計画案
 - (7) 2008年度収支予算案
 - (8) その他
7. 議長解任
8. 閉会

専門分科会の概要紹介

2008年度春季大会では下記の通り、7件の専門分科会が開かれます。

衛星による降水観測：TRMM 10周年を迎えて

日時：大会第1日（5月18日）13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：熱帯降雨観測衛星（TRMM）は2007年11月末に10年間の観測を達成する。TRMMは世界で初めて降雨レーダを搭載することにより、熱帯・亜熱帯域の降水量推定精度の向上や降水システムの理解に大きく貢献してきたが、さらに長期間のデータが利用可能となったことにより、降水の年々変動などの研究にも役立てられ始めている。またTRMMは衛星群による降水分布観測の中で、重要な役割を演じている。例えば、我が国でもマイクロ波放射計による全球降水マップ作成プロジェクト（通称 GSMaP）が2002年から2007年の5年間、（独）科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業（CREST）水循環テーマの一環として実施され、世界に比肩するアルゴリズムの開発が行われた。本専門分科会では、TRMM観測10周年を機に全球降水の長期データの利用および研究から得られた成果や、TRMMの後継計画である全球降水観測計画（GPM）時代における全球降水データの応用や将来展望について議論を行いたい。

コンビナー：沖 理子（宇宙航空研究開発機構）、高橋暢宏（情報通信研究機構）、中澤哲夫（気象研究所）

大気リモートセンシングデータ解析技術における工夫

日時：大会第1日（5月18日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：近年、衛星搭載センサーや地上リモートセンシング技術の向上により、これまで検出が難しかった新たな大気物理量の抽出が可能になりつつある。これらは単に検出器の技術的な向上のみならず、データ解析手法における様々な工夫が為し得たものである。本分科会は、このようなリモートセンシングデータの解析技術について、“なるほど”と思われる工夫を紹介しあい、基本技術や観測対象の異なる研究者間で、新たな工夫や応用に繋げるための情報交換の場としたい。今回は特に大気中気体成分の導出手法につ

いて、衛星観測、地上観測（受動型）、ライダー観測などの分野の話題を集めたい。ただ、それ以外の話題でもおもしろいと思われるものであれば何でも歓迎であるので、是非とも投稿頂きたい。

コンビナー：今須良一、齋藤尚子（東京大学気候システム研究センター）、笠井康子（情報通信研究機構）、杉本伸夫、太田芳文（国立環境研究所）

季節予報を定量的に利用する

日時：大会第1日（5月18日）13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：気象庁が世界に先駆け、アンサンブル手法による数値予報を季節予報に導入してからおよそ12年がたち、数値予報結果の特性などの知見も蓄積されてきた。いうまでもなく、毎回の予報のためには膨大な数値計算が行なわれており、これら膨大なデータをもっと活用する術はないのか、特に、定量的な利用はできないのかということに期待したくなる。他方、利用するには、対象とする現象によってどのような影響が現れるのか、影響を軽減するための方策、そのために必要な情報や精度など、といった点が明確になっていないと難しい。このような観点から、情報を提供する側、利用する側双方から、定量的な利用に向けての世界の動向、季節予報利用の現状や課題などを提起しあい、定量的利用に向けて、何が必要か、何をすべきかなどについて議論する。なお、利活用ということに重きをおき、予測手法・予測技術は話題としない。

コンビナー：渡辺典昭（気象庁気候情報課）、登内道彦（気象業務支援センター）、経田正幸（気象庁気候情報課）

南極大型大気レーダーを軸とした極域大気研究の可能性

日時：大会第4日（5月21日） 13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：南極昭和基地は、気象庁定常観測、極地研を中心とした各研究機関による大気研究観測が精力的に行なわれ、世界的に見ても数少ない総合大気観測拠点となっている。南極大気は人間活動から隔絶されているため、ノイズが小さく、地球気候のモニタリングに適しており、また、カタバ風や、オゾンホール、夜光雲、オーロラなど、顕著な（シグナルが大きい）大気現象が見られる領域でもある。しかしながら、下層大気と超高層大気をつなぐ中層大気の観測は手薄であり、上下結合がとりわけ重要な極域大気研究は他の緯度帯に比べれば、遅れているといわざるを得ない。2000年に始まった南極昭和基地大型大気レーダー計画（PANSY）では、この問題を克服し、既存の大気観測をつないで極域大気全体を統合的に捉えるため、南極で運用可能な大型大気レーダー（MSTレーダー）の開発およびフィージビリティスタディを行なって来た。現在、ほぼ全ての問題点を解決し、実現可能なシステムが見えてきた。この計画の国内外の評価は高く、IUGGを初め、関連するほとんどの国際学術組織からの支持を得ている。PANSY研究グループでは、毎年極地研を中心に研究集会を開催し、技術開発および科学目標について広く議論を積み重ねてきた。本分科会では、気象学会の多くの会員に参加いただき、本計画の意義や可能性についてさらに議論を深めたいと考えている。

コンピーナー：佐藤 薫（東京大学大学院理学系研究科）、山内 恭、堤 雅基（国立極地研究所）、齊藤昭則（京都大学大学院理学研究科）、富川喜弘（国立極地研究所）

CMIP3マルチ気候モデルにおける大気海洋諸現象の再現性比較

日時：大会第4日（5月21日） 13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：地球温暖化に伴う環境変化が、具体的にいかなる現象としてどのような振幅で発現し得るかは、私達の生活にとって重要な問題である。世界各国の機関において温暖化の将来予測のための気候モデルシミュレーションが行われ、IPCCの第4次報告書にその新しい知見が集約された。本専門分科会では、様々な大気海洋現象に焦点をあて、WCRP第3次結合モデル相互比較プログラム（CMIP3）の下に集約されているマルチモデル20世紀結合実験結果と観測データとの比較解析によって大気海洋諸現象についての気候モデル再現性を検討した研究成果を持ち寄り、個々の現象の再現性およびそれらの相互関係を議論する。この議論を通じて、現象変化予測のためのモデルの検討に資するとともに、対象とする現象のメカニズムについての理解を深め、温暖化の影響でそれらが将来被り得る変化・変調についての予測結果の解釈にも資することを目標とする。

コンピーナー：高藪 縁、木本昌秀（東京大学気候システム研究センター）、尾瀬智昭（気象研究所）、中村 尚（東京大学大学院理学系研究科）

広域スケールの陸域生物圏研究に関する最新の動向

日時：大会第4日（5月21日） 13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：陸域生物圏－大気間の相互作用プロセスは、広域スケールの気候形成に対して様々な影響を与え、地球環境を理解する上で重要な研究対象となっている。例えば第2期IGBPでは、iLEAPS（統合的陸域生態-大気プロセス研究）がコアプロジェクトとして推進されているし、地球システム統合モデル開発でも生物圏プロセスの取り込みは大きな課題の1つとなっている。本専門分科会では、従来の気象学で着目されてきた熱水収支だけでなく、物質交換の観測・モデリングや衛星観測とデータ同化などのトピックスを取り上げ、この分野の最新動向を紹介する。各種プロジェクトが平行して進められている現状を踏まえ、大気研究との学際的な情報交換を促進するとともに、今後の課題の明確化と効果的な研究推進について議論を行いたい。

コンピーナー：伊藤昭彦（国立環境研究所）、馬淵和雄、青木輝夫（気象研究所）、大谷義一（森林総合研究所）、西田顕郎（筑波大学）、佐々井崇博（産業総合技術研究所）

持続可能で安全な都市環境への気象研究の役割

日時：大会第4日（5月21日） 13:30～17:00

場所：D会場

趣旨：近年世界的に都市への人口集中が続く中、東京サリン事件、2003年のヨーロッパでの熱波など、気象に関連する都市の自然的・人為的災害や都市環境に対する世界的な関心が高まっている。2009年6月の第7回国際都市気候会議（横浜）を前に、都市気候・気象に関する観測的研究、数値モデルによる研究、これらの社会的問題への応用研究等について相互の連携を促進する専門分科会を開催する。特に①複雑で多様性を持つ都市空間における気象観測データを今後どのように整理していくのか、②メソスケールからマイクロスケールの気象モデルはどのように設計されるべきか、③これらのモデルに組み込まれる都市情報はどのように取得され整理されるべきか、④研究の結果はどのように社会に伝達・還元されるべきか等の直面する課題に対して議論と連携を深めたい。なお、講演についてはかなりの部分を招待講演とすることを予定しています。また、単に事例研究的な発表ではなく上記4点のいずれかについて明瞭なアイデアをお持ちの一般発表を歓迎いたします。

コンピーナー：近藤裕昭（産業技術総合研究所）、足永靖信（建築研究所）、一ノ瀬俊明（国立環境研究所）、神田学（東京工業大学）、日下博幸（筑波大学）、菅原広史（防衛大学校）、藤部文昭（気象研究所）、持田 灯（東北大学）、森山正和（神戸大学）、森脇 亮（愛媛大学）

公開気象講演会のお知らせ

※公開気象講演会への参加は無料・事前の申込も不要です。

日時：2008年5月18日（日）（大会第1日） 13:30～16:30

場所：開港記念会館講堂（A会場）

趣旨：日本気象学会2008年度春季大会の横浜での開催にあわせて、一般市民の方々に気象に関する最近の研究成果をわかりやすく解説することを目的とした公開講演会を開催します。今回は、昨年ノーベル平和賞を受賞したIPCC（気候変動に関する政府間パネル）によってまとめられた第4次評価報告書に書かれた地球温暖化に関する最新の科学的知見と、今年から始まる京都議定書の実施に向けた横浜市での取り組み、更に、横浜市内で活動する市民団体（NPO）の活動について、中・高生にも分かるようにやさしく解説します。

テーマおよび講演者：

1. 「IPCC第4次評価報告書にみる地球温暖化」近藤洋輝氏
地球環境フロンティア研究センター特任上席研究員
2. (仮) 「脱温暖化都市横浜を目指して」横浜市環境創造局温暖化対策課長（4月からは新組織に移行予定）
3. (仮) 「市民団体の取り組み」佐藤一子氏 特定非営利活動法人ソフトエネルギープロジェクト理事長

問い合わせ先：古川武彦（気象コンパス）

E-mail：takefuru@eos.ocn.ne.jp

研究会のお知らせ

何れも参加は無料・事前の申込も不要ですので、興味のある方はご自由にご参加下さい。

第30回メソ気象研究会

日時：2008年5月17日（土）（大会前日） 13:30～17:00

場所：気象庁講堂（東京都千代田区大手町1-3-4）

テーマ：「雪や降雪研究の最近の展開」

コンビーナー：遊馬芳雄（琉球大理）

内容：2005/06年冬季の豪雪は我々の記憶に新しいところですが、昨年、今年の冬は降雪量が少ないにもかかわらず、2月下旬には北海道や北日本を暴風雪が襲い、入学試験が延期され、航空や鉄道、道路などにも大きな影響が出ました。雪や降雪問題はメソ気象研究の重要な課題ですが、過去のテーマを調べたところ、最近メソ研究会であまり取り上げられていません。そこで今回のメソ研究会では雪や降雪に焦点をあてました。最近精力的に観測が行われている人工降雪実験、マルチパラメータレーダーによる粒子判別、雪粒子浮遊による低温室実験の観測と実験の三つの話題を前半に、そして、後半にはモデルと観測の比較実験、シアラインでの渦状降雪雲の力学過程についての講演をお願いしました。雪や降雪現象は古くて新しいテーマですが、新しい試みや知見も数多く得られています。多くの方々のご参加と活発な議論をお願いします。

プログラム：

- 13:30-13:35 趣旨説明
- 13:35-14:15 村上正隆（気象研）人工降雪研究の現状
- 14:15-14:50 岩波 越（防災科研）Xバンド偏波レーダーによる降雪雲の粒子判別
- 14:50-15:30 高橋庸哉（北教大）実験室から降雪過程を読む～鉛直過冷却雲風洞による雪結晶浮遊成長実験から～
- 15:30-15:40 休憩
- 15:40-16:15 中井専人（防災科研）降雪特性の観測とモデルによる再現性
- 16:15-16:50 川島正行（北大低温研）シアライン上に生じる渦状降雪雲の数値実験

16:50-17:00 総合討論

世話人：坪木和久（名大地球水循環）、加藤輝之（気象研）、小倉義光（東大海洋研）

連絡先：遊馬芳雄（琉球大理） E-mail：asuma@sci.u-ryukyu.ac.jp

第4回気象庁数値モデル研究会

気象庁では、気象学の分野で用いられているさまざまな数値モデルに関する情報交換の場として、平成17年度から「気象庁数値モデル研究会」を開催しています。今年度は、雲解像モデルの物理過程のなかで、顕著現象のシミュレーションや温暖化予測の不確定性の最大要因である雲・放射・エロゾルフィードバックの研究に深い関わりを持つ雲物理過程に焦点をあて、最新の研究を取り上げます。さらに、モデルを用いた研究に取り組みたいと考えておられる研究者のみならず、気象庁非静力学モデルで実データシミュレーションを行う方法を紹介します。モデルの開発者、利用者など関係各位の幅広い参加を期待いたします。詳しくは、数値予報研究開発プラットフォームのホームページ (<http://pfi.kishou.go.jp>)でもお知らせいたします。

日時：2008年5月17日（土）（大会前日） 17:30～19:30

場所：気象庁講堂（東京都千代田区大手町1-3-4）

話題および講演者：

「雲物理過程モデリングの現状と最新の研究」

成田正巳（気象庁数値予報）気象庁メソ数値予報モデルにおけるシングルモーメントバルク法雲物理過程

橋本明弘（気象研）雲物理過程モデリングの近未来像 統一雲物理モデリング～エロゾルへの拡張～

井口享道（東大気候システム）雲の鉛直微物理構造と放射

荒波恒平（気象庁数値予報）気象庁非静力学モデルをインストールしたブータブルDVDによる実データシミュレーション

参加費：無料

注意事項（第30回メソ気象研究会及び第4回気象庁数値モデル研究会共通）：自家用車での来庁はご遠慮下さい。

当日は閉庁日ですので、正面玄関(KKR東京側)のみ開いています。研究会の受付で名札を受け取り、着用して下さい。

問い合わせ先：気象庁総務部企画課 横山 博
(気象庁モデル技術開発推進本部事務局)
TEL：03-3212-8341 (内線2227)
E-mail：hiroshi.yokoyama@met.kishou.go.jp

惑星大気研究連絡会

日時：2008年5月17日(土) (大会前日) 13:30~18:00
場所：東京大学(本郷キャンパス)・理学部3号館320号室(3階大教室)

テーマ：金星大気循環の多重平衡解

内容：一昨年 ESA の Venus Express が金星に到着したのに引き続き、2010年には日本の金星気象衛星 Planet-C の打ち上げが予定され、金星大気に関する関心が世界的に高まっています。Planet-C の主要な科学目標である金星大気スーパーローテーションに関しては、近年、日本を中心に数値実験的研究が進み、興味深い結果が得られつつあります。最近では、スーパーローテーションの生成・維持における平均東西流と子午面循環(および夜昼間対流)の相互作用の重要性が明らかになってきました。また、地上観測からも上層大気現象における夜昼間対流と平均東西流の重要性が示唆されています。そこで今春の惑星大気研究連絡会では、金星大気研究の初期段階に提出され、現在再び注目を集めている「金星大気循環の多重平衡解」に関する勉強会を企画しました。この理論によれば、金星では2つの異なる大気の運動状態、即ち一つは強い平均東西流と弱い子午面循環の組合せ、もう一つは弱い平均東西流と強い子午面循環の組合せ、がともに実現可能であり、そして、現在の金星下層大気では何らかの理由で前者が実現していることとなります。また、見方を変えれば、下層での平均東西流の卓越、上層での夜昼間対流の卓越という観測事実の両方を説明するとも考えられます。今回の勉強会の前半では、理論の提唱者である松田先生に金星研究の歴史を振り返りつつ金星大気力学の初歩から多重平衡解まで丁寧に説明して頂き、後半では城戸さんに大循環モデルを用いて多重平衡解の再現に成功した最新の研究成果を紹介して頂く予定です。講演および質疑応答には十分な時間を確保したいと思いますので、惑星大気研究者はもちろん、初学者の皆様、惑星大気を専門としないが興味をお持ちの幅広い分野の皆様も含め、ご参加をお待ちしております。

プログラム(予定)：

1. 「金星大気循環の多重平衡解」
松田佳久(東京学芸大学・自然科学系)
2. 「金星GCMによる多重平衡解の再現実験」
城戸敦善(九州大学・総合理工学府)

連絡先：高木征弘(東大理)

TEL：03-5841-4285, FAX：03-5841-8791
E-mail：wtk-staff@gfd-dennou.org
URL：http://wtk.gfd-dennou.org/

気象教育懇談会

気象学は最も身近な自然科学の一つであるとともに、自然環境にも密接に関係し、21世紀の自然科学教育において重要な位置を占めています。そこで、気象学に関わる教育やアウトリーチについての問題を考える場として気象教育懇談会を開くことに致しました。学校教育に限らず、研究者、気象業務担当者、高等教育関係者にお集まり頂き、情報交換ができればと考えております。本年は、気象予報士としてマスコミ等でご活躍の方から話題提供を頂き、意見交換したいと思います。

日時：2008年5月18日(日) (大会第1日) 17:15~19:15

場所：開港記念会館1号室(C会場)

講師：田代大輔(気象協会)ほか

問い合わせ先：畠山正恒(聖光学院中学高等学校)

E-mail：hatakeya@hotmail.com

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2008年5月20日(火) (大会第3日) 17:15~2時間程度

場所：開港記念会館講堂(A会場)

話題：さまざまな視点で見た北極圏の変化

小林宏之(日本航空)「パイロットから見た北極圏の変化」
猪上 淳(IORGC)「止まらない北極海の海水減少」
飯島慈裕(IORGC)「水循環変化がもたらすシベリア凍土環境の変化」
齋藤冬樹(FRCGC)「氷床変動のシミュレーションについて」

今回の極域・研究連絡会は、21世紀になって顕著な変化が観測されるようになった北極圏についての講演会です。この数年、北極海では海水の減少が顕著で、昨年秋には海水面積が観測史上最小を記録しました。また、IPC C 4次報告において、21世紀後半には夏の北極海海水の大部分が消滅する可能性が指摘され、マスコミでも大きく取り上げられるなど、北極圏の気候変化は社会的にも大きな注目を集めています。また、北極海付近だけでなく、シベリアなど大陸の高緯度地域でも注目すべき変化が起きています。そこで、今回は、様々な視点から北極圏の変化を論ずべく、4名の方に講演をお願いしました。まず、日本航空(JAL)の現役機長より講演をして頂きます。実際の飛行中に撮影された海水やシベリア上空の写真を紹介して頂きながら、ご自身で目の当たりにされた環境変化についてお話を頂く予定です。続いて、観測による海水変動及びシベリア凍土の変動について、さらに数値モデルによる温暖化実験で見られる雪氷圏の将来予測について、最新の研究成果をご紹介頂く予定です。

代表：山崎孝治(北大院地球環境)

世話人：平沢尚彦(極地研)、中村 尚(東大院理)、浮田甚郎(新潟大自然科学)、高田久美子(FRCGC)、阿部彩子(東大気候システム)、佐藤 薫(東大院理)、本田明治(FRCGC)、齋藤冬樹(FRCGC)、猪上 淳(IORGC)、高谷康太郎(FRCGC)

URL：http://polaris.nipr.ac.jp/~pras/coolnet/cl_index

問い合わせ先：高谷康太郎(FRCGC)

TEL：045-778-5526, FAX：045-778-5707
E-mail：takaya@jamstec.go.jp

オゾン研究連絡会

日時：2008年5月20日（火）（大会第3日） セッション終了後から2時間以内

場所：開港記念会館1号室（C会場）

内容：昨年、成層圏オゾン破壊で中心的な役割を担っているCIOOCIの光解離に関して、その吸収断面積の新しいデータが報告されました。それによると従来の推奨値よりも吸収断面積が低いことになり、これまでのオゾンホール発生メカニズムに本質的な修正が迫られる、という事から多くの関心を呼んでいます。今回のオゾン研究連絡会では、測定に関する基礎的な話を含め、新たに報告さ

れたCIOOCIの吸収断面積に関してお話をさせて頂く予定です。関心をお持ちの方は是非お集まり下さい。

講演者および講演題目：

高橋けんし（京大）「CIO二量体が成層圏オゾン破壊に及ぼすインパクトに関する最近の研究のレビュー」

世話人：笠井康子（NICT）、川上修司、河本望（JAXA）、永島達也（環境研）、庭野将徳（FRCGC）、村田 功（東北大院環境科学）

連絡先：村田 功（東北大院環境科学）

TEL：022-795-5776, FAX：022-795-5775

E-mail：murata@pat.geophys.tohoku.ac.jp

横浜地方気象台見学ツアーのお知らせ

今回の横浜地区における大会開催にあたり、横浜地方気象台のご協力により、気象台見学ツアーが実施できることになりました。神奈川県気象業務の拠点である横浜地方気象台は1896年（明治29年）8月1日に、神奈川県測候所として設立、昭和2年に横浜港を見下ろす現在地（山手町）に移りました。簡易なアールデコ様式の庁舎は横浜のシンボルの一つとして市民に親しまれてきました。現在増改築工事のため、見学内容は一部制限されますが、最近では一般の学会員が目にする機会の少なくなった観測や予報業務の現場に直接触れることの出来る絶好の機会ですので、是非御参加下さい。

実施日：2008年5月19日（月）、20日（火）

見学時間：11時00分、13時30分の2回、各50分程度

見学人数：各回10人2組で一日当たり40人、両日で合計80人（最大）

見学場所：新庁舎（現業室）、露場（旧庁舎は工事のため見学できません）

参加方法：

- 大会期間中、開港記念会館内の受付場所にて、申込票に必要事項を記入し参加予約をして下さい。その際に整理券をお渡しし、集合場所・時間をお知らせします。各回とも規定の人数に達し次第締め切ります。
- 申込時にお伝えした集合時間間に、整理券を持って大会会場内の指定集合場所に集まって下さい。気象台付近の現地集合場所まで引率者が案内します（路線バス利

用予定）。引率の不要な方は、申込時にお伝えする現地集合場所まで直接行って頂いてもかまいません（要整理券）。移動の際の交通費（実費）は各自ご負担下さい。

- 現地集合場所で整理券を回収した後、引率者の指示に従って気象台を訪問します。（業務に支障を来しますので、見学者が直接気象台を訪問することは絶対にお止め下さい。）

注意：警報が発表される等、当日の状況によっては、見学が急遽中止になる場合もあります。あらかじめご了承下さい。

担当：村上茂教（海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター）

問合せ用e-mailアドレス：msj2008req@jamstec.go.jp

（気象台への直接のお問い合わせはご遠慮願います）

（参考）横浜地方気象台へのアクセス

- 大会会場周辺より徒歩約30分
- みなとみらい線「元町・中華街」下車、徒歩約10分
- JR「石川町」下車、徒歩約20分
- 路線バス「港の見える丘公園前」下車、徒歩3分

（大会会場周辺からは、以下の2系統が利用できます）

神奈川中央交通11系統（保土ヶ谷駅東口行）、「日本大通り・県庁前」より約6分

横浜市交通局 あかいくつバス（港の見える丘公園前行）、「日本大通り」より約18分

保育施設幹旋について

今大会では、保育施設の幹旋ならびに保育施設利用の一部補助を行います。利用を希望される方は下記の担当者までご連絡ください。

連絡先：E-mail: msj2008req@jamstec.go.jp

担当：吉田 聡（海洋研究開発機構地球シミュレータセンター） TEL：045-778-5866, FAX：045-778-5492

予稿の再掲について

2007年度秋季大会講演予稿集において印刷に不具合のあった「A254 金子 和真（気象予報士）2002～2006年に発生した苦小牧沖上位層気候に関する考察」の予稿を、本大会講演予稿集の本文冒頭に再掲させて頂きました。

秋季大会の予告

2008年度秋季大会は、2008年11月19日（水）～21日（金）に仙台国際センターで開催される予定です。